

なかしま 仲島遺跡 2

大野城市教育委員会

解説シート考古No.4『仲島遺跡1』では、弥生時代の仲島遺跡、特に青銅器関係の遺物について触れました。この解説シートでは、古墳時代の仲島遺跡について紹介します。仲島遺跡がどこにあるのかは、解説シート『仲島遺跡1』を参照してください。

仲島遺跡で見つかった古墳時代の主な遺構には、たてあなじゅうきょあと 竪穴住居跡、ほったてぼしらたてものあと 掘立柱建物跡、溝などがあります。古墳時代という時代を特徴づけている当時の有力者の墓＝古墳は見つかりません。

下の写真は、仲島遺跡の南端で見つかった竪穴住居跡（右側の四角い掘り込み）と、掘立柱建物跡2棟（左側の丸い穴）です。どちらも古墳時代後期（6世紀の後半頃）のものです。

竪穴住居跡の床面には4つの丸い穴が見られます。これは柱が立てられていた穴（柱穴）で、4本の柱がもともとあって屋根を支えていたことがわかります。手前の壁際に土を掘り残している部分があります。これは調理を行っていたかまど 竈の跡です。崩れてしまって原形を留めていませんでしたが、粘土で作られていて、中には焼けた土や炭がたくさん詰まっていた。一体どのような料理が作られていたのでしょうか。4つの柱穴はこの竈をよけるように、片側に寄せて掘られています。一般に柱穴は竪穴住居の床面に均等に掘られていますので、珍しい構造の住居といえるでしょう。

掘立柱建物とは、地面に掘った柱穴に柱を立て、床を地面から浮かせたたかゆかしき 高床式の建物のことです。



柱穴は柱よりもかなり大きく掘られていますので、柱穴の大きさほど柱が太かったわけではありません。仲島遺跡の場合、倉庫として使われていたと考えられます。写真には2棟分の倉庫の跡が写っています。手前の3×4=12個の柱穴が1棟分、後ろの3×3=9個の柱穴がもう1棟分に当たります。

このような竪穴住居や倉庫が集まって、古墳時代の仲島遺跡の集落は構成されていました。

古墳時代の仲島遺跡の集落の跡からは日常使われていた土器（土師器と須恵器）の他に、いろいろな祭祀具（まじないの道具）も出土しています。そのいくつかを以下に掲げます。

1は子持勾玉です。滑石（蠟石とも呼ばれる）という軟らかい石で作られています。基本的な形は勾玉ですが、背や腹に当たる部分にちょうど勾玉の子どものような突起が付いているので呼びます。勾玉は身体に着ける装飾品ですが、子持勾玉は勾玉を模造して作った「石製模造品」というまじないに使われた道具の一種です。仲島遺跡の子持勾玉は写真のとおり下の部分が欠けていますが、本来は上下対照の形をしています。また、古い型式の子持勾玉は厚手ですが、この子持勾玉は扁平でペラペラの作りです。これは退化した型式のものといえます。

2は子持勾玉と同様、滑石で作られた石製模造品の一種です。刀子（ナイフのこと）あるいは刀を模造したものと考えられます。もちろん、物を切るために作られたものではありません。他に類例がなく、珍しいものです。

3は土製勾玉です。文字どおり、土をこねて勾玉の形にしたまじないの道具です。子持勾玉とは形が違いますが、やはり装飾品ではなく「土製模造品」と分類されている遺物の一種です。

4は土製模造鏡です。これも土製模造品の一種で、鏡を模造して作られています。指でつまみ上げて鈕（鏡に紐を通す部分）に当たる部分を作っているだけの簡単なものです。

これらの祭祀具が実際にどのような使われ方をしていたのか、つまり、どのようなまじないが行われていたのかを知ることは、残念ながらよくわかっていないのが実状です。

